

【対談】池辺晋一郎 vs 井上道義

池辺晋一郎と井上道義が語る、オーケストラとホールの幸福な関係

金沢では2年目のラ・フォル・ジュルネ一色で盛り上がっている2日目、メインステージとなっている石川県立音楽堂(以下、音楽堂)の音楽監督池辺晋一郎とオーケストラ・アンサンブル金沢(以下、OEK)の音楽監督井上道義に、OEKの現在・過去・未来を熱く語り合っていた。



「OEKという存在が金沢市なり、石川県というものを発信するのに最大の役割を果たしているという事実を、世界に示すことが目標です」

「OEKを世界的な室内オーケストラにしたい。僕ら独自の文化と掛け合わせたオリジナルなものを作っていきたい」

池辺晋一郎と井上道義 [2007年1月東京・井上宅で撮影] (次頁の写真も同様)

石川県立音楽堂の音響について

——音楽堂の音響をどのように思われていますか？

池辺 この音響は凄くいいですね。全国で最も好きなホールの一つです。他にも立场上(笑)みなどみらいの、特に小ホールとか、オペラシティも好きだけど、GPの時など、響き過ぎて風呂場みたいになっちゃうところが難だね。

井上 そう、このクリアな音響のホールがOEK独自の音を創り上げたと言っても過言ではないでしょう。

——そのような素晴らしい音響の音楽堂を本拠地に構え、常に実際の演奏会場でリハーサルができることのメリットを詳しく教えてください。

池辺 メリットというより、実はこれがオケのあるべき姿なのに、100パーセント実現できているのはOEKだけでしょう。リハーサルと本番の場所が違うと、試行錯誤の連続で、なかなか独自の音が出来てこない。精神的な面でも、自分たちの家であるかのように、日頃から慣れ親しんでいる場所でコンサートができるという事は、平常心を保ち、一番よい状態で演奏会ができるという事に役立つ

ているはず。

井上 たとえば音楽家は、自分たちの楽器に対しての凄く愛情を持っているのね。たとえばヴァイオリンとかを大切にするのはわかるんだけど、ティンパニー奏者がバチを溺愛したりね(笑)、ちょっと不可解なほどの愛着があるんだね。彼らにとっては楽器がそれほど体の一部になってしまっているんだけど、その感覚がホールにもあてはまるようになる。いつも音を奏でている空間すら自分の一部となり、ハードがソフトを造り出すんだ。

——ラ・フォル・ジュルネのようなイベントをどのように捉えていますか？

池辺 アーティストティック・ディレクターのルネ・マルタンと私たちは共通する思想を持っており、それは「クラシック音楽は敷居の高いものではない」「クラシック音楽の聴き方にルールなどない」ということです。このようなイベントを通して、1日中音楽浸けになり、音楽漬けとなった金沢を、美味しい「音楽の漬物」(笑)にするのが主旨です。これはしかし、実現するには大変なエネルギーを要するわけですね。事務局などの方の苦勞は計り知れないが、最終的には金沢の聴衆の素晴らしさが成功の鍵なの

写真提供：オーケストラ・アンサンブル金沢
取材・文：中東生

です。日本では、これだけの催しをするには、百数十万から200万の人口の街でないとい無理、といった前程があるが、40万人そこそこの街でこれだけ成功させられるのは金沢だからだと思えますね。何故かといえば、「文化にお金を使う」習慣が、何世代にも渡って培われているという土壌があるからです。文化に出資することが、自分たちを豊かにするということを知っているのが金沢人なんです。

井上 僕はやはり、オケが成功を作り出していると思うな。金沢の人たちは、「たくさんはいらないから、良いものが欲しい」という「一点豪華主義」なんです。その「良いもの」にOEKがなり得た。そして、そのオケを、誇りを持って支えていく、そんな場所なんです。

僕らにとっては、このフェスティヴァルは忙しくて、今日もぶっつけ本番のプログラムがあったけど、3日前にしっかりと練習してあったから、それなりの演奏が出来た。そういう打たれ強さを養うには、いい機会だね(笑)。こんなに逆境に強いオーケストラもなかなかないね。

永久名誉音楽監督の岩城宏之の存在

——永久名誉音楽監督の岩城宏之がOEKに遺したものは何ですか？ それは現在どのように受け継がれていますか？

井上 その強さは、岩城さんから来ているんだ。自転車操作ですつときたからね。忙しいオケは他にもあるけれど、OEKは人数が少ないから代わりがない。池辺 それから、OEKほど室内楽の活動を活発にしているオケもないんじゃないかな。

井上 室内楽をやると楽員さんの収入になるし、室内楽もきちんとやれる能力のある人じゃないと、このオケは面白くなくなる。だからOEKが室内楽を斡旋しています。最初は多分、そういうことでもめたとと思う。室内楽ばかりやっている、オケに影響が出るとかね。それを岩城さんが乗り越えてきて、練習しなくてもできるオケになっちゃっているんだね(笑)。ヨーロッパ人は体力があつて、サッカーでもロスタイムで日本はよく負けたじゃない？ でも最近は勝つようになりつつある。それと同じだよ。

池辺 サッカーの話が出たけれど、別の共通点もあるんですよ。今はプロ野球がサッカーを見習って、それぞれの地方にそれぞれのチームがあるような形態になってきている。オケもそうあるべきだと思うし、そうやってきつ々つある。その先駆者が岩城さんだったんだ。

井上 岩城さんも僕も同じ思想でね、いいオケを作りたいだけで、それが金沢じゃなくてもいいんだ。いいお客さんがいて、金銭面のサポートがあつて、ホールがあれば、どこでもいい。ただ、ここにそういう理想的ベースがあつたらしいんだ。

池辺 コンサートを客席から見ている分るけれど、OEKは自分たちのオーケストラだという意識がすごくあるね。井上 お客さんが素晴らしいというのもあるけれど、オケに雇われ根性みたいなところがないのが伝わっているんじゃないかな。岩城さんの思想は完全に僕に受け継がれて

いると思う。現代曲に対するちよつとしたアプローチの違いだけが対立している問題だけれど(笑)。

池辺 その、コンポーザー・イン・レジデンスのシステムは、僕は素晴らしいと思うけどね。

「イン・レジデンス」だから、住まなきゃダメだって井上さんは言うんだけどね(笑)。金沢市に住むというレジデンスじゃなくてね、OEKというオーケストラがその作曲者の心の中に棲み着くんですよ。そしてその作曲者もオーケストラの中に棲み着くんです。

井上 理想主義だよ(笑)。OEKが心の中に棲み着く、って棲み着いてねえもん(笑)。コンポーザー・オブ・ザ・イヤーにしてよ、嘘の標語はよくない(笑)。

世界的な室内オーケストラを目指す

——今後のOEKの展望、新しい企画などありましたら、お話し下さい。

池辺 細かい企画というよりも、世界的に経済状況が厳しくなっている中、OEKという存在が金沢市なり、石川県とい

うものを発信するのに最大の役割を果たしているという事実を、大袈裟に言えば、世界に示すことが目標です。音楽は電波に乗って飛んでいくからね。こういう時代だからこそ、OEKの活動はもっと活発になって欲しいし、それに対する県や市の後押しもより強固



になって欲しい。

井上 僕はね、OEKを世界的な室内オーケストラにしたい。これはとても難しいことです。室内オケにはより能力が高い人材が必要だからです。一人一人の音が全部聴こえてしまいますから。僕は半年で、楽団員全員的能力や性格が全部わかったね。新日フィルは3年やってわからなかった。聴こえないんだもん。だから、お客さんもきつとそうなんだよね。1人でも足を引っぱるような人がいてはならない。そういう点で、OEKもゼロから考え直さなければならぬ時代に入っています。人間でいえば成人に達したんだから。

それから加賀宝生流とクラシック音楽の融合を目指したいですね。日本人が西洋音楽をどれだけ頑張っても、ヨーロッパ人にはかなわない、って見られるからね。僕ら独自の文化と掛け合わせたオリジナルなものを作っていきたい。それは東京の夏音楽祭でもやるので、ぜひ観に来て下さい！

